

方向

第一一六号 一九九〇年七月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

古い朽ちた大きな家

—法華経巡礼 48—

1990.6.12. 原田憲雄

3-26. さて、世尊は、そのときこのような偈を説いた——

たとえば、ある人の、古い朽ちた大きな家が、たいへん弱っていた、としよう、

露台はこわれ、柱も根もとが腐敗して。(39)

樓閣の窓はところどころくずれ、壁や壁掛けは剥げ、

朽ちて年経たあずまやは傾き、草屋根はいたるところ穴があいている。(40)

五百人以上の人たちがその家に住んでいて、

ごたごたとあばら小屋が多く、糞尿が溢れて汚らしい。(41)

屋根の骨組みはすべて落ち、かべも同様にくずれていて、

秃鷹が幾千万もそこに住み、鳩や、鼻や、その他の鳥も。(42)

おそろしい蛇がそこにおいて、あちらこちらに猛毒の大蛇、

種々のサソリやネズミがいて、ここは凶悪な生き物の住みかなのだ。(43)

あちらにもこちらにも、人ならぬものがいて、どこも糞尿まみれになり、

シラミや蛆虫や蠶がいっぱい、犬や豺が叫んでいる。(44)

そこには恐ろしい狼がいて、人間の死骸を嗜り、

かれらが出てゆく隙をねらって、犬や豺がひかえているのだ。(45)

力の弱いものは虐まれつつ、あちらでもこちらでも、嗜みあって、

喧嘩をし、叫ぶのだ。その家はこのようにたいへん恐ろしい。(46)

邪悪な心の夜叉たちが住んでいる、人間の死骸を引き裂きながら。

そこにはまた、あちらこちらに、百足や、牛蛇や、猛獣どもも。(47)

あちらこちらに、それらは子どもを生みつける、さまざまの巢を作って、

それらの子どもを生みつけても生みつけても、夜叉は次々に食いつくす。(48)

邪悪な心の夜叉たちは、他の生き物を飽くまで食うが、

他の生き物の肉で体が満足すると、そこではげしい争いをする。(49)

崩れた部屋には、苛酷で、邪悪な心のクンバーダ鬼が住み、

一ヴィタステイ、あるいは一ハスタ、二ハスタといった大ききで、往ったり来たり。(50)

かれらはまた、犬の足をつかまえて、地面に上向きにし、

頸を締めあげ、おびやかしたり、責めたりして、楽しんでる。(51)

また、裸で、黒く、弱くて、のっぼの、大きな餓鬼たちもすんでいる、

餓えて食べ物求めながら、嘆き、なきさけぶ、あちらこちらで。(52)

あるものは針の喉、あるものは牛のあたま、人の大きさ、犬の大きさ、

髪ふりみだし、声をあげる、食べ物にかつえ、こがれて。(53)

そこではまた、窓や、小窓から、いつも四方をうかがっている、

夜叉や、餓鬼、またピシャーチャ鬼、禿鷹などが、食べ物を探し求めて。(54)

atha khalu bhagavāns tasyāṃ velāyāṃ imā gāthā abhāsata ||

yathā hi puruṣasya bhaved agāraṃ jīrṇaṃ mahantaṃ ca sudurbalaṃ ca/

viśīrṇa prāsādu tathā bhaveta stambhās ca mūlesu bhaveyu pūṭikāḥ ||39||

gavākṣa-harṁiyā gaditaika-deśā viśīrṇa kuḍyaṃ kata lepanaṃ ca /

jīrṇa pravṛddhaṃ dhuta(W:jīrṇu pravṛddhodhṛta) vedikaṃ ca tṛṇa-cchadan sarvata opatantaṃ ||40||

śātāna pañvāna anūnakūṇāṃ āvāsu so tatra bhaveta prāṇinām /

bahūni ca niṣkuṭa-samkafāni uccāra-pūrnāni juḡupsitāni ||41||

gopānāsī vigadita tatra sarvā kuḍyās (W:kuḍyā) ca bhittīs ca tathaiiva srasṭāḥ /

śṛdhrāṇa koḷyo nivasanti tatra pārāvatolūka tathā 'nya-pakṣiṇaḥ ||42||

āśīviṣā dārūṇa tatra santi deśe-pradeśesu mahā-viṣogṛāḥ /

vicītrikā vṛścika mūsikās ca etāna āvāsu suduṣṭa-prāṇinām ||43||

deše ca deše amanuṣya bhūyo uccāra-prasrāva vināśītaṃ ca /
kr̥mī-kīṭa-khad̥yotaka-pūritaṃ ca śvabhiḥ śṛgālais ca ninādītaṃ ca // 44//
bheruṇḍakā dāruṇa tatra santi manuṣya-kuṇḍapāni vibhaks(ṃ:ca bhaks)ayantaḥ /
teṣāṃ ca niryaṇu pratīksamāṇāḥ śvānāḥ śṛgālais ca vasanty aneke // 45//
te durbalā nitya kṣudhbābhībhūtā deśesu deśesu vikhādamaṇāḥ /
kalahaṃ karontās ca ninādayanti subhairavaṃ tad gṛhaṃ eva-rūpaṃ // 46//
suraudra-cittā pi vasantī yakṣā manuṣya-kuṇḍapāni vikad̥ḥamaṇāḥ /
deśesu deśesu vasantī tatra śatā-padī gonasakās ca vyādāḥ // 47//
deśesu deśesu ca niksīpanti te potakāṇy ālayanāni kṛtvā /
nyastāni-nyastāni ca tāni teṣāṃ te yakṣa bhūyo paribhaksayanti // 48//
yadā ca te yakṣa bhavanti tṛptāḥ para-satva khādīva suraudra-cittāḥ /
para-satva-māṃsaiḥ paritṛpta-gātrāḥ kalahaṃ tadā tatra karonti tīvraṃ // 49//
vidhvasta-leneṣu vasantī tatra kumbhāṇḍakā dāruṇa raudra-cittāḥ /
vitasti-mātrās talha hasta-mātrā dvi-hasta-mātrās e' anacāṅkramanti // 50//
te cāpi śvānān parigrhya pādair uttānakān kṛtvā talhaiṣa bhūman /
gṛīvāsu colpīḍya vitam(ṃ:vibhart)sayanto vyāyāsa(ṃ:vābādha)yaantaś ca ramanti tatra // 51//

nānās (BHS: nagnās) ca kṛṣṇās ca tathaiiva durbalā uccā mahantās ca vasantī pretāḥ /
jighatsitā bhojana mārgamānā āṛta-svaram krandiṣu tatṛa tatṛa ||52||
sūcī-mukhā goṇa-mukhās ca ke-cit maṇṣya-mātrās tatha śvāna-mātrāḥ /
prakīṛṇa-keśās ca karonti śabdān āhāra-tṛṣṇā paridāhyamānāḥ ||53||
catur-diśam cātra vilokayanti gavākṣa-ullokanakehi nityam /
le yakṣa-pretās ca piśācakās ca grdhṛās ca āhāra gavesamānāḥ ||54||

歌人・大塚五朗 (七) 1930.6.21. 原田憲雄

小学校教員時代 (四)

一九三三年 五郎、二十六歳。

夏草紀行

大正十二年六月福島県三春町に、友、天野多津雄を訪はんとして七日ばかりの旅に出でたり。

山あひに見えてき青き朝空の旅の心と対(あ)ひてわびしき

さらさらと聞けば聞こゆる松風の夕かたまけて吹きのわびしき

一羽あて鳴くはかなしき行々子へよしきりゝの更にかなしも群れあてぞ鳴く

樹々の隙に葉をひろげたる朴の樹のしみじみ見れば花つけにけり

山の樹に風はさやぎて夕暮の沼にうかべる河骨の花

陸奥の幾山河を越え来つつ君と逢ひたり逢ひてわびしき

遠くゐて思ふに如かじ相見ての心きみしく君と対へり

一夜ねて今か別れむ宇多川の川瀬にそそぐ雨のつめたさ

〈山原 六一六〉

野 茨 の 花

一週間ばかりの旅よりかへれば即ち畏友高野草叢の死を報せらるへ。而も吾家とは一町と距らざる

某病院に廿日あまりも入院せしといふに何も知らずして死なせし事のまたなく悲しき限りである。彼

は兵營の生活を終へると間もなく上京し、忽ち加藤一夫氏の幕下に参して種々画策する所あつたが、

そのはげしい労働と、寒さの如き窮乏のため遂に病を得て斃れたのである。

彼を考へこれを思ふ時おのづから涙のあふれて来るのを覚える。

一葉の端書に友の死を知れりたゞ一葉の端書なりけり

今は空しけれど彼が久しく臥りしといふ病室を訪れて。

悔めども今は術なみしみじみと病室を出て仰ぐ青空

悲しみの極りあつつ野に出づれば野は野茨の盛りなりけり

空しくも友を死なせてあなあはれ野茨の花を見てあたりけり

〈山原 六一六〉

加藤一夫（二六キ一五二）和歌山県出身。明治学院神学部を卒業し、数年、伝道していたが、文学運動に転換し、トルストイの影響を受け、キリスト教的社会主義と無政府主義の混じった立場をとり、民衆芸術派の代表となった。農本塾の建設をも計画していたので、高野氏はそのことに関わったのであろう。

信 濃 路

大正十二年八月、機を得て郷里信濃に遊ぶ。

あきづける陽の親しきよ落葉松の林のなかの一条の路（裾野原三首）

おのづからあふれ流るる山風の夕陽の中の樹を吹ける見ゆ

浅間嶺の裾野の草にいちはやく秋づきあつ咲ける刈萱

八重山を越えさりきつつ仰ぐなり風に吹かれて落つる日輪（草津行二首）

聞きすめば松に松風鳴りさゆれ山岨へやまそばへに來て昼となりにけり

秋空の晴れてはろけし火の山のあなしづしづと煙はく見ゆ（浅間山二首）

旅人の心かなしく越す山の浅間の山に雲たちさわぐ

死に難き生命（いのち）抱きて旅に出づ旅の信濃の秋風の音（千曲川三首）

はるばると思へば遠く來つるかな千曲の川の北に流るる

白々と佐久の平に秋されば流れていよよ寂し千曲は へ山原（ち、壱）

わが病みて臥（こや）る窓辺の青檜のゆれ明るきに小鳥なき寄る

『駒鳥が庭樹の檜に来鳴くよ』と障子へだてていへる妻かも

妻は湯に吾子（あこ）は遊びにいだしつつひとり寝て聞く駒鳥のこゑ

（山原 五七）

独居

男ひとり住みて幽けき家の庭は木影ほがらに朝あけにけり

此頃の朝のめざめを寂します春の大地におつる樹の影

庭に落ちし松の樹の影こまやかにのびて座敷の中に及べり

明日はわれを見には来るとふ子のたより思ひわびつつ夕餉（ゆふげ）食（を）すなり

知れる人ありもなければ寂しからむはやかへらなと母にせがむ子

母のそば離れぬ吾子のあはれさをあはれとは知りてなほ叱るなり

妻と子が摘みし春野のなづな草夕餉に食すと心足らへり

ほろ苦き春のなづなの舌さはり幾年われは野に住みなれし

野に住みて野にあきそめしわが舌にされどもうまし春のなづなは

かへさねばならぬと知りてかへせしがかくも心の乱れはてたり（妻をかへしやりて）

妻さびて急ぎや居らむ桑虫の道の細りの歩み難きに

現し世は寂しけれども相寄りて生き耐へたりわれとわが妻（「生き耐へたり」は原文のまま）

堤草の冬枯れ草に夕あかりこもりて寒く霰ふるなり

冬川の淀をなしたる一とところ空の寒さをうかべたるかも (山原 七六四)

これで「福島在住時代―その二―」が終わり、「福井在住時代 大正十三年」がこれに続く。

福井高工書記時代

一九二四年 五郎、二十七歳。

小学校教員をやめ、福井県立高等工業学校の書記となり、福井市に移住する。「山原」の「巻末手記」にいう。福井在住時代―私は小学校の義務年限が終ると同時に、その当時創立の福井高工の書記として勤める事となり、一家を挙げて福井に移住した。福井在住の一年間は、北陸の暗い空合と、足羽川沿岸の平明な気分が心に残つてゐる位のもので、実にあわたしい一年間であつた。従つて歌も少く、懐かしさも比較的薄いわけである。

夏 ひばり

幾日か雨かも降りて今朝いづる濡色寒き陽の大ききよ

起きいでてあなやとばかり驚きぬ濡れて大きく陽はのぼるなり

ひそびそと夕陽になれる夏深(なつふけ)の草生(くさふ)にこもりなける雲雀子(ひばりこ)

夏空の深きにあつつ鳴くひばり鳴く音はさびて夕づきにけり

大空の高きに揚がり寂しからむいまは一途になける真雲雀

一心に雲雀の鳴くを聞きぬしがいつか寂しきこと思ひ居り 〔山原 八五八〕

八角金盤の花

朝な朝な霜おきさゆるみ冬来て花さしひらくやつで白花 〔「ひらく」の原文は「さらく」〕
ねもごろに葉をさしひらく冬庭の八角金盤へやつであはあは花を持ちたり

早稲田大学学生時代

この時代について『山原』の「巻末手記」に次ぎのよういいう。

それ〔福井在住時代〕からこの歌集では直ちに京都在住時代になつてゐるけれど、実際はその間に東京在住時代の四ヶ年が介在するわけなのであるが、この四年間に私には歌らしい歌が一首もないのである。激しい都会の空気が私の心から歌らしい気持を奪つたのか、貧しい生活にかまけて了つたのか、いやさういふより、さうした生活の間に在つてもなほ心の関けきを持ちつづける事の出来ない私自身の「心の至らなさ」がさうさせたといつた方が正しいのであらう。そのいづれにもせよ私にとつて一番私の心に近い生活をした早稲田の学生時代に一首の歌をも持ち得なかつたといふ事は今思ひみても寂しい事に相違ない。

事務職員の生活の単調にあきた五郎は、長兄大塚広通と、妻松子の父萩原喜惣次にはかり、夫妻は広通宅に寄宿し、妻が浅草の小学校に勤務して生活を支え、長男の朗は萩原家に預け、早稲田大学に入学したのである。

中国の詩人と仏教 (八)

1930. 6. 23. 原田憲雄

一〇、曹 植

曹操には、二十五人の男の子がありました。歌妓から正夫人となった卞(べん)氏の生んだのが、丕・彰・植の三人でした。二十五人のうち、十三歳で亡くなった沖(ちゅう)をのぞくと、丕と植が文事・武事ともにずば抜けてすぐれ、そうして弟の植が兄の丕より才気煥発でした。丕は社交的で、慎重でした。曹植は率直で、無慮でした。父の曹操は二人をともに尊重しましたが、愛情は植に傾きました。後継者として植をと考えたこともありましたが、二人ははじめは仲のよい兄弟で、植には兄の不利を計る気持はなかつたようですが、取り巻きの連中に、身びいきからの凌ぎあいが起こり、やがて兄の弟に対する愛情が冷めます。そのうえ、植の無遠慮な行動の幾つかが父曹操の気持をも冷まし、ついに丕が曹操の後継者として決定します。それでも、父親の間はよかつたのですが、二二〇年、曹操が死に、曹丕が皇帝の位につくと、皇帝は、曹植をはじめ、おのれの地位を脅かす恐れのある兄弟とその取り巻きを圧迫し、あるいは次ぎつぎに殺してゆきました。この年、文帝曹丕は三十四歳、曹植は二十九歳です。

つくよみは たかどの てらし、みづのごと ひかり ただよふ。ものおもふ をみなの ありて、ひたな
げき あはれさ まさる。「たそや かく なげかふきみの」 「これはこれ たびびとのつま、せの ゆ
きて すでに とをとせ、 われ つねに ひとりしすめば、きみや みちのへのちり、 あれは みなそ
このひち、 うきしづみ かたみに たがひ、 いつのひに はたや あふべき。 あはれ われ かぜと

しなりて、 ゆかむかな きみのみむねに。 きみのみむね はた ひらかずば、 あがこころ なにによ
るべき」

これは「七哀」「怨詩行」「明月詩」「雜詩」などの題を与えられて伝わる曹植の代表作のひとつです。弦・管楽器を伴奏とする民歌の一体とも見られ、げんに内容は旅人の妻の哀しみをうたうのですから、いわばフィクシオンです。また、制作時期も不明です。しかしこの旅人の妻の哀しみには、兄文帝の愛情を失った弟曹植の哀しみの感情が移入してはいませんか。ついでながら、この古めかしい訳は、一九五四年につくり、「幽歡（ゆうかん）集」（一九五六年・方向社）に収めたものです。その頃かれの作品を愛読したとみえ、『平松（へいしょう）集』（一九五八年・方向社）には「応氏を送る 二首」の第一首を、『琴菽（りくが）集』（一九六四年・方向社）には「応氏を送る 二首」全部と「五遊詠」を文語訳し、『中国名詩選』（一九七三年・人文書院）に「応氏を送る 二首」を口語で改訳しています。その訳文だけを次に掲げましょう。

北邙（ほくぼう）の坂にのぼり、洛陽の山をのぞむ。洛陽のなんと**いう寂寞**、**宮殿も館（やかた）もことごとく**焼けうせた。垣 土塼 みなくずれ、いばら あらくさ 天まではびこる。かつての老人の姿は見え、新しい少年たちをみまもるばかり。そばだち歩く小径（こみち）もなく、田は荒れて鋤くすべもない。久しく帰らなかつた旅人には、街の見わけもつかないのだ。野なかのなんと**いうさびしさ**、千里 人家の煙もたぬ。したしみあつたあの日を思えば、胸ふたがって 言葉も出ぬ。

やすらかな時は得がたく、たのしい出合いは長続きせぬ。天地ははてしなく、人の命は朝の露。せめてもわ

が友情をのべたく、北境にゆく友を送ろうと、したしい人たちがあつまつて、この河陽（かよう）に宴（うたげ）をひらいた。酒さかな乏しいはずはないのだが、きみの杯の進まぬことだ。ねんごろなわたしへの期待、おこたえできずに恥かしい。山川は、はるかにへだたり、別れはせまり、再会の日は遠い。できることなら比翼（ひよく）の鳥となって、羽ひろげ、ともに高く飛びたいのだが。

この詩の作時は二一一年かと推測されていて、それなら曹植は二十歳、平原侯（へいげんこう）で、送った相手の「応氏」は植の側近であった応瑒（おうよう）と、その弟の応璩（おうきよ）だろうといわれています。二首が同時の作かどうか、応氏が前記のふたりかどうかについても、異説があります。いずれにしてもこの詩には戦乱で瓦礫の巷となった洛陽の模様が伺われます。これを読むたびに、一九四六年、台湾から敗戦日本に帰り、上陸した鹿児島から京都までの道筋で見た惨澹たる風景がまざまざと蘇ります。さて、曹植は「弁道論」という文章で神仙説や道教を批判し、次のようにいっています。

世間には方士と称する連中がいる。わが父の魏王（曹操）は、そのことごとくを招かれた。甘陵（かんりょう）の甘始（かんし）、廬江（ろこう）の左慈（さじ）、陽城（ようじょう）の鄒儉（ちけん）などで、甘始は呼吸・体操の、左慈は性生活調整の、鄒儉は食餌療法の名人で、みな数百歳だと自称していた。魏の国に招かれたのは、かれらが怪しげなわざで民衆をたぶらかすといけないから、目の届くところに集めておいて禁止されたので、不老不死を願って仙人の安期生（あんきせい）を招待した秦の始皇帝の愚行とは同じではない。わが家では父の王をはじめ太子やわたしたち兄弟はみな、かれらを嘲笑して、信じないのだ。

文中で兄の曹丕のことを「太子」といっていますから、この論の作られたのは二一七―二二〇年の間だったことが明らかで、曹植は二十六歳から二十九歳でした。

それならかれもまた、父や兄と同様、死ぬまで儒教的合理主義者だったか、というと、そうではないように感ぜられます。民衆に信者をもつ道教の指導者を目の届くところに集めて、伝道活動を制限し、信者の反乱を防止するのは、政治家としては巧みな方法でしょうが、そういう悪賢いやりかたで管理されるようになったとき、される方で、それを讚美し、謳歌し続けられるかどうか、という問題がまずあり、曹植こそその悪辣な管理に死ぬまでさいなみぬかれた当の人の人なのです。次いでかれの芸術家肌の気象が、時間と空間を超越する思想や信仰に盲目でありつづけられたかどうかという問題があります。さきに触れた「五遊詠」を、拙訳で紹介します。

九州は歩むに足らず、天雲（あまぐも）の彼方（そきへ）をとび、八紘のそとにさまよひ、地のはてをめぐり遊ばむ。夕ばえの衣をまとひ、虹の裳すそわれはかさねて、天蓋を花やぎかさし、六つの龍あめはせゆけば 日のかげのなほ移らぬに、たちまちにみ空にいたる。丹（に）のとびら御門（みかど）にひらけ、わきの戸の朱（あけ）にかがやく。文昌（ぶんしょう）の宮居（みやゐ）もとほり、太微（たいび）の堂にのぼれば、西のべに帝（みかど）やすらひ、ひむがしにきみらつどへり。白玉はおびの上（へ）につけ、しらつゆは口（くち）にふふみ、靈芝（れいし）生（お）ふるそのにたたずみ、はなさけるみちさすらふに、王子喬（おうしきょう）薬（くすり）をささげ、羨門子高（せんもんしこう）よき処方（すべ）すすむ。この薬 われはものみて、かぎりなく いのちのべむかも。

地上の世界を去って、天上世界に遊ぼうと願う詩で、屈原（くつげん）の「遠遊」の詩に学んだものでしょう。九州・八紘はともに地上世界、文昌・太微はいずれも天上に存在すると伝える宮殿。王子喬も羨門子高も仙人です。屈原（前三一〇五）は戦国時代の楚の王族の詩人。懐（かい）王・襄（じょう）王を助けたが、讒言により江南に流され、汨羅（べきら）の淵で投身自殺しました。楚辞（そじ）と呼ばれる文体の主要な作家です。楚辞が中国神仙思想のひとつの源流なのですから、この詩を作ったときの曹植は、忠臣でありながら王に憎まれて流浪する屈原の不幸をおのれに引き付けて歌う心情に傾いているにしても、仙人の薬方（やくほう）によって現実の不满をまぎらわしたい気持がなかったとはいえないでしょう。『琴瑟集』で、かれについて、わたしは次のように説明しています。

曹植（二〇一三）字は子建（しけん）。三国志で有名な魏の武帝曹操の子。兄の曹丕と相統争いをして敗れ、以後不遇な生涯を送った。はげしい時代のかわり目に波瀾に富んだ生涯を生きた人だけに、その詩は複雑多彩で、詩品の高いことは中国文学史でも卓立し、名実ともに魏代文学の代表者である。なお、断定するためにはかなり検討する要はあろうが、仏教思想と仏経のうつくしきとを受容した最初期の文学者の有力な一人だと考えられる。

かれが仏教思想と仏経の美しきを受容した、とわたしが考える理由を、これからお話しいたします。

まず、曹植が梵唄（ぼんばい）を作ったという伝説があります。梵唄とは、インドの詠法による歌唱のことですが、七世紀の僧道世（どうせ）の編集した仏教百科事典ともいふべき『法苑珠林』（ほうおんじゅりん）に次

のような記事があります。

曹植は、仏教經典を読むたびに、涙ぐみ讚嘆して、これこそ究極の真理だと思った。そこで七曲の仏教讚歌を作り、節づけをした。ひとびとはこれをくちずさみ、以後の讚歌の模範とした。かれは山東の魚山（ぎょざん、ござん）に遊んだが、ふと空中に梵天の音楽を聞いた。その声は清雅哀婉で心をつきうごかすものであった。始めは彼だけが耳にしたのだが、やがて付き随う者たちも聞いた。そこでその曲調をまねて梵唄を作った。歌詞・曲調ともに後のものの典型となった。梵唄が世にあらわれた最初である。

日本の比叡山に伝わる梵唄を「魚山流（ござんりゅう）」というのは曹植によって始められた梵唄を直伝しているというのです。たいへん有名で、梵唄といえどもこの伝説が持ち出されます。ところがちかごろこの話に異議がとえられました。「法苑珠林」は、曹植が死んで四世紀も後のものであり、その前にもかれが梵唄を作ったという説はあるが、いずれも仏教側の文献ばかりで、正史である『三国志』には、曹植と仏教の結び付きを示す記事がないから、これは仏教側がでっちあげた妄伝だ、というのです。

確かに『三国志』にはふたつを結び付ける記事はありませんが、正史が仏教に冷淡なことはすでに度々申しました。ことに儒教以外の宗教の取り締まりを厳しくした魏の文帝・明帝の時代に、このふたりの皇帝に憎まれていた曹植の、仏教への傾斜は、いわば内緒ごとだったでしょうから、正史が触れないのは当然でしょう。

曹植一家が揃って読書家だったことはさきに触れました。仏教經典はまず洛陽で翻訳されました。打ち続く戦乱に洛陽は瓦礫の巷となりました。しかし仏教經典はそんな時代にも書写され、保存されていましたから、曹植

でも曹丕でも、仏教経典が手に入れば、信じるためではなく、征服し管理すべき対象として、その研究のためにも読まなかったでしょうか。まして好奇心の人一倍強い曹植が、異国伝来の新奇な文献に目をふさいだでしょうか。政治・軍事はもとより、兄弟との交際さえ禁じられた人間にとっては、読書や詩作くらいしか、することがないではありませんか。そんな境地におかれた曹植が、仏教経典を読み、たとえ生みの親を殺した国王の物語である『阿闍世王経』を読んで涙を流し、仏の教えを讃嘆したとしても、むしろ自然ではありませんか。

魚山は、いまの山東省東阿（とうあ）の西約六キロメートルにあります。東阿は、曹植が二二九年三十八歳から二三二年四十一歳までのあしかけ四年を任地として過ごしたところです。名は「王」であっても監視つきで、身の回りの用すら足しがたい貧しい日常であり、正史である『三国志』「魏書」の「曹植伝」の文章を借りると「常に汲々として歎（よろこ）び無し」という絶望にとざされた晩年でした。「遂に疾を發して薨ず。時に年四十一」と記したあとに「伝」は次のエピソードを添えています。

初め、植、魚山に登り、東阿に臨み、喟然（きぜん）として帰焉（かえらんかな）の心あり。遂に営みて墓を為（つく）る。

魚山は、曹植が生前にみずから墳墓を定めた地だったので。正史の伝の書き方としては変わっていますが、「言いたいことは他にもいろいろあるのだが」と口ごもる感じではありませんか。

正史が口ごもって言わなかったことのなかに、梵唄制作のことがあり、「洛神賦」制作のことがあったと、わたしは推測するのですが、それについては次回で。

六月の初め、土曜日の夜だった。食事を終って、わたし達が何となく三人でそのまま座っていた時、電話のベルが鳴った。すぐに娘が立って受話器をとった。何だろうと娘の顔を見ていると、

「幸福地蔵さんを祀っていませんか、と言うてはるんやけど、そういう地蔵さんこの辺にいはるの」

「さあ、聞いたことないねえ。〃幸福〃なんて言うのやったら、新しい地蔵さんと違うか。昔からのお地蔵さんに〃幸福〃なんて言葉をつかうかしら」

「日蓮宗では地蔵さんは祀らないが、その地蔵さんがどうかしたのか」

「なんか、テレビで紹介していた、言うてはったけど……」

それから後にもなんども電話のベルが鳴った。わたし達は交代で受話器をとった。いずれもその地蔵さんにかかわることらしいが、何のことだか分からず、返事のしようもなかった。ただ、その夕方六時から放映された料理番組で紹介されたらしい、ということだけは分かった。

翌日も、たてつづけに、電話のベルが鳴る。

「お参りしたいのだが、どう行けばよいのか」

「ひとに連れて行ってくれとたのまれた。住所はどこなのか」

などと、いきなり問いかけてくる。「あなたは、どなたですか。どういうご用なのですか」とたずねなければ、返事もできない。電話するのは京都のひとは稀で、福井、神戸、東京、なかには北海道からのひともいる。

「たずねてくる人の声を聞いてみると、そんなにガツガツ幸福を捜さなければならぬほど、せっぱつまつて不幸な人やとは思えんがなあ」と主人は頭をかしげている。

「料理番組で紹介されたということですから、そのお寺で特別の精進料理でもしてはって、食べに行こうということかもしれませんね。そのほうが幸福も現実的やわ。おいしいものを捜している人は多いそうですよ」

「そんなものかなあ。飢えて、親や子どもを捨てなければならぬ不幸なひと、この世界にはすくなくないのやがなあ」

などと話していたが、毎日たびたび電話がかかり、話しがとんでもない方向に走ったりするので、わたしはテレビ局に電話して、その料理番組の係りを呼んでもらい「わたしの方ではお地藏さんは祀っていないが、番組ではどういふ紹介をされたのか」とたずねると、係りは逆に驚き、何のことかわからないようである。そこで、先週の番組以来、問い合わせ電話がたくさん掛かってくるという事情をくわしく説明すると、やっとのみ込めたらしい。それはご迷惑をお掛けした。視聴者のほうで間違えているので、紹介したのは西京区某町の「鈴虫寺・妙徳山・華嚴禪寺」です。妙徳山だけおぼえていて、電話帳で妙徳寺さんを見つけ電話されるのでしよう。とのことだった。事情はわかったが、テレビ局は、申し訳ないとはいっても、番組なり何なりで注意を促すことはしてくれないのか、しても間違う人は注意なんぞ見もしないのか、電話の掛かり続けることに変わりがない。掛けてくる一人が問わず語りには、

「その寺の和尚さんが、小さなお札を両手にはさんで、このように手を合わせて家にかえると、華嚴禪寺の地藏さんはわらじを履いておられるので、ずっと皆さんの家まで一緒に行ってくださいるのです。小説家の林真理子

さんも、皇族と結婚なさる紀子さんも、この地藏さんに参られて、良縁にめぐまれ幸福になられました、とおっしゃったのだそうです。わたしはあまりよく見ていなかったのですが、見ていた娘が、わあそんなんやったら私もお参りに行きたいわあ、と言うものですから、ちよっとお尋ねしたのですけど」

そういうことだったのかと、わたしにはやっと話が分かってきた。「それならこれこれの寺ですから、そちらにお尋ねください」と電話を切った。「また尋ねてきたのか」と主人がきくので、さきほどの話しをすると、主人がいうには、

「娘もだめなら、母親もだめだ。仏さまに参詣したいのなら娘は自分で寺を捜せばいいではないか。頼んでも自分で捜すようにさせるのが、母親の娘に対するほんとうの親切だ。その前に、外から見て幸福に見える結婚が、当人にとっての幸福であるとはかぎらず、いま幸福だとしても永遠に続くものでもない。諸行無常がすべてに通じる筋道で、だからこそ努力しなさいというのが、釈尊の教えだ。幸福はみずから作り上げてゆくものだろう、棚からぼた餅のように落ちてくるものではなく、乞食のように人から貰うものでもない。そういう簡単なことさえ考えようとしなない母親だから、いま手にしている幸福に気がつかず他人の幸福ばかり羨むような娘を育てあげることになる。なによりいけないのが、華嚴禪寺の和尚という男だ。禪寺というからには禪宗だろう。禪宗の寺はどこでも玄関に「照願脚下」と札をはっているではないか。「足許を見よ」ということだ。他人の幸福を羨む暇があったら、自分がそれに価するほどの努力をしているかどうかを反省しなさい、ということだ。幸福なんぞを欲しがってきよろきよろとうろつく人に、そう言って上げるのこそ、禪寺の和尚のしごとではないのか。足が腐って無くなるまで座禪したという達磨の開いた禪宗の和尚が、わらじ履きの地藏を担いで、ニセモノの幸福を

売り歩くとはどういうことだ。そういう連中のことを昔の禪師は、因果の道理のわからぬ野狐（やこ）といい、五百回生まれかわっても野狐の身を脱けだすことはできまいと嘆かれた。幸福、幸福とうわつく娘も、その尻に乗って走り出す母親も、和尚に化けた野狐も、地獄の釜で五十七億六千万年、猛火で焼いて、焼いて、焼き尽くされんことには、ほんとうの生き方は見えてこんのだろう」

わたしは自分が叱られているような気がして、しゅんとしてしまった。

それから二日ほどして、里の母の所へ行つたので、その料理番組を見なかったか尋ねてみた。母は見えていたが、誰か女優さんがその寺を訪ねていたように思うが料理などは出していなかった。というほどのことで、よく憶えていない様子だった。しかし十年以上も前に、老人会の団体でその寺に参つたことがある、と言つた。そのとき、坊さんが地獄極楽の話をされた。三途の川に奪衣婆がいて、衣を剥ぎ取ることや、お地蔵さんが助けてくださる話だった。その寺のお札を両手にはきんで拜むと、願いをかなえてもらえると言われたので、お札を買つて来たが、どこへ置いたか忘れたという。地獄の閻魔さんとお地蔵さんは同体だといわれ、お地蔵さんは西方極楽浄土への往生を助けてくださる菩薩だとも伝えられるので、地獄極楽の話に出てくるのはもつともである。

京都では地藏信仰が盛んで、現在でも町々にお地蔵さんが祀られていて、花や水を供える人が絶えない。昔から家の前に祀っていたのは、愛宕山の火伏地藏だというし、地藏盆のは子どもの健康を祈る延命地藏らしい。今わたし達の町内は、小学生までの子どもは、男ばかりの四人になった。それでも地藏盆はする。常には顔を会わすこともない人達が、その時は集まってお地蔵さんを祀り、赤や白の提灯に電球を入れたりして飾り付けをする。子どもが少ないので、当て物のくじびきや、金魚すくいはなくなった。わたしどもの娘が小さかったころには、

おもちゃのブローチや首飾り、エンピツやメモ帳をもらって大喜びしていたが、いまの子どもは、手提げ袋やノートなどを用意してもらっても、いらぬと言って捨てて帰る。くじを引いたり、輪投げをしたりして、大勢の子どもが競争で取り合うのでなければ、つまらないのはよく分かるのだが……。そして夜には、後片付けを済ませたおとな達がビールを飲んだりして懇親会をしている。新しくできた団地では、お地蔵さんがないので、子どものために、壬生寺などでお地蔵さんを借りてきて地蔵盆をするそうである。

地蔵菩薩は、頭がくりくりで、冠もなく、髪もなく、他の仏像と感じが違う。頭巾やよだれ掛けをつけておられるところを見ると、日本特有のものかと思うが、インド、パキスタンなどで信仰されていたもので、現在でもネパールには残っているという。地蔵とは、大地が一切の宝を蔵していると同じように、一切の徳を蔵するものという意味で、あらゆるところの人々の苦しみを未来永劫にわたって救済するという誓いを立てた菩薩だそうである。東大寺の講堂に光明皇后が高さ一丈の地蔵菩薩像を造られた記録があるということだが、信仰が広がったのはずっと後のようだし、鎌倉時代でも個人的な信仰だったらしく、滋賀県でも、母の里は個人で祀り、わたしの生れた所では、村人が地蔵堂に集まる。この村では茶摘みや餅搗きの出稼ぎに京都へ出たから、都の風習を持ち帰ったのだろうか。

人の苦しみを救うという誓願が強調され、貧乏に苦しみ、結婚できずに苦しむ人を救うという、具体的な解釈が出てきたらしくて、鎌倉時代の説教集にすでに、地蔵菩薩を信仰して幸せな結婚ができた女性の話があるという。そういえばテレビを見て電話してくる人に「縁結びの地蔵さんがありますか」というのもあった。林真理子さんや紀子さんがこの寺に参詣されたとしても、あの人達の生き方を考えてみれば、安易にあやかろうなどとは

「隣の欲張り婆さん」に過ぎないことに気がつく。妙徳山・華嚴禪寺は『都名所図会』にも出ていて、享保七年（一七三三）鳳潭上人の開創、臨濟宗永源寺派、本尊は大日如来、左に釈迦仏、右に開基鳳潭像とある。地藏菩薩のことは書いてないから、新しく造ったのかもしれない。

一週間が過ぎても日に四、五回は電話があった。わたしが「西京区の華嚴禪寺だそうですから、そちらへお尋ねください」などといっていると、主人が、

「あんたはやさしいなあ。ぼくはあの和尚や、自分のほうから躡まされに行こうとする人達を見ていると、ムカムカしてくる。この年になって、あまり腹を立てないようにしようと、思っているのやけどなあ」という。

そう言われて、わたしの何でも自分のこととして考えない無責任さが、こんなところに出てくるのだろうか、主人は他人の事でもあんなに真剣に考えるのになあ、と思えてきた。

その夜、主人が和田利男先生主宰の俳誌『桑珠』をもってきて、「あんたも読んだだろうが、すみ子夫人のこの句をどう思う」と言った。

ごみ袋出しおき春眠糺ぎ足せり

しづかなる音を互（かた）みに蜷汁

福だるま願ひなければ目を入れず

繰り返して黙読していると、「おだやかだが、毅然としておられるやろ」

わたしは、本当にそうだと感じ、あしたから電話が掛かってきても「わかりません」と言おうと思った。

そして翌日、きつそく掛かってきた電話に「わかりません」と答えた。これでいいはずだと思うのだけれど、

わたしには何となくすつきりしないものがある。相手がどう考え、何をしようとしているのか分らないが、知っていることは教え、後は相手の判断に任したほうが気が楽だ。無責任かもしれないが、他人の甘えを許さないからには、自分にもそれだけの覚悟がいる。わたしには、すべての人が悟りにいたるまで地獄で亡者と付き合うほどの決心は、とてもできない。

子どもの頃うたった唄に、こんなのがあった。

村のはずれのお地藏さんは

いつもにこにこ見てござる

.....

仲よく遊べと見てござる

ほれ、見てござる

地藏菩薩は、ほとけさまだけれど、浄土に住まず、地獄にいて、永劫、ひとびとと苦しみを共にしてください。そうである。しかし、そのことに甘えて、「もつとお金を」「よい人と結婚を」と、自分勝手なお願いばかりしている、そういつまでも、にこにこ見てござると、いうわけにはいかないだろう。

主人が「いいかげんにせえ、甘ツたれが。自分の飲の皮ばかりつばらす。そんな連中は、地獄の釜で、焼いて、焼いて、焼きかえして……」と怒りだすのを見ると、「ああ、やっぱりお地藏さんと閻魔さんは同体やなあ」と思うのである。